

9) 引越しに伴う「外出回数」の変化

引越し（5年以内）に伴う「外出回数」の変化の状況を表59に示す。

総計でみると、「変化なし」は最近5年間に引越しありの131名中73名(55.7%)、「増加」は13名(9.9%)、「少し減少」は17名(13.0%)、「とても減少」は26名(19.8%)であった。要介護度による差は著明ではなかった。

10) 引越しに伴う「料理」を行う回数の変化

引越し（5年以内）に伴う「料理」を行う回数の変化の状況を表60に示す。

総計でみると「変化なし」は131名中83名(63.4%)、「増加」は4名(3.1%)、「少し減少」は10名(7.6%)、「とても減少」は33名(25.2%)であった。要介護度による差はなかった。

表59 引越しによる外出回数の変化（5年以内）

	要支援			要介護1			要介護2			総計
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
変化なし	5名 71.4%	12名 48.0%	17名 53.1%	10名 66.7%	31名 58.5%	41名 60.3%	4名 44.4%	11名 50.0%	15名 48.4%	73名 55.7%
増加	1 14.3%	2 8.0%	3 9.4%	2 13.3%	5 9.4%	7 10.3%	1 11.1%	2 9.1%	3 9.7%	13 9.9%
少し減少	0 0.0%	6 24.0%	6 18.6%	0 0.0%	5 9.4%	5 7.4%	1 11.1%	5 22.7%	6 19.4%	17 13.0%
とても減少	1 14.3%	5 20.0%	6 18.8%	3 20.0%	10 18.9%	13 19.1%	3 33.3%	4 18.2%	7 22.6%	26 19.8%
返答なし	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 3.8%	2 2.9%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 1.5%
計	7 100%	25 100%	32 100%	15 100%	53 100%	68 100%	9 100%	22 100%	31 100%	131 100%

表60 引越しによる料理を行なう回数の変化（5年以内）

	要支援			要介護1			要介護2			総計
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
変化なし	5名 71.4%	14名 56.0%	19名 59.4%	12名 80.0%	31名 58.5%	43名 63.2%	7名 77.8%	14名 63.8%	21名 67.7%	83名 63.4%
増加	1 14.3%	0 0.0%	1 3.1%	0 0.0%	1 1.9%	1 1.5%	1 11.1%	1 4.5%	2 6.5%	4 3.1%
少し減少	0 0.0%	3 12.0%	3 9.4%	1 6.7%	2 3.8%	3 4.4%	0 0.0%	4 18.2%	4 12.9%	10 7.6%
とても減少	0 0.0%	8 32.0%	8 25.0%	2 13.3%	19 35.8%	21 30.9%	1 11.1%	3 13.6%	4 12.9%	33 25.2%
返答なし	1 14.3%	0 0.0%	1 3.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.8%
計	7 100%	25 100%	32 100%	15 100%	53 100%	68 100%	9 100%	22 100%	31 100%	131 100%

11) 引越しに伴う「その他家事」を行う回数  
の変化

引越し（5年以内）に伴う「その他家事」  
を行う回数の変化の状況を表 61 に示す。

総計で見ると「変化なし」は 131 名中 80  
名(61.1%)、「増加」は 8 名(6.1%)、「少し減  
少」は 21 名(16.0%)、「とても減少」は 22  
名(16.8%)であった。要介護度による差は明  
らかではなかった。

数の変化

引越し（5年以内）に伴う「身の回り行為」  
を行う回数の変化の状況を表 62 に示す。

総計で見ると「変化なし」は 131 名中 97  
名(74.0%)、「増加」は 6 名(4.6%)、「少し減  
少」は 19 名(14.5%)、「とても減少」は 8 名  
(6.1%)であった。要介護度との関連では「変  
化なし」は要支援 81.3%、要介護 1 76.5%、  
要介護 2 61.3%と要介護度が進むほど減少  
する傾向がみられた。

12) 引越しに伴う「身の回り行為」を行う回

表 61 引越しに伴うその他の家事の回数の変化（5年以内）

	要支援			要介護 1			要介護 2			総計
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
変化なし	5名 71.4%	12名 48.0%	17名 53.1%	11名 73.3%	34名 64.2%	45名 66.2%	7名 77.8%	11名 50.0%	18名 58.1%	80名 61.1%
増加	1 14.3%	3 12.0%	4 12.5%	0 0.0%	2 3.8%	2 2.9%	1 11.1%	1 4.5%	2 6.5%	8 6.1%
少し減少	1 14.3%	6 24.0%	7 21.9%	1 6.7%	9 17.0%	10 14.7%	0 0.0%	4 18.2%	4 12.9%	21 16.0%
とても減少	0 0.0%	4 16.0%	4 12.5%	3 20.0%	8 15.1%	11 16.2%	1 11.1%	6 27.3%	7 22.6%	22 16.8%
返答なし	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
計	7 100%	25 100%	32 100%	15 100%	53 100%	68 100%	9 100%	22 100%	31 100%	131 100%

表 62 引越しに伴う身の回り行為の回数の変化（5年以内）

	要支援			要介護 1			要介護 2			総計
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
変化なし	6名 85.7%	20名 80.0%	26名 81.3%	12名 80.0%	40名 75.5%	52名 76.5%	6名 66.7%	13名 59.1%	19名 61.3%	97名 74.0%
増加	1 14.3%	1 4.0%	2 6.3%	0 0.0%	2 3.8%	2 2.9%	1 11.1%	1 4.5%	2 6.5%	6 4.6%
少し減少	0 0.0%	1 4.0%	1 3.1%	3 20.0%	8 15.1%	11 16.2%	1 11.1%	6 27.3%	7 22.6%	19 14.5%
とても減少	0 0.0%	3 12.0%	3 9.4%	0 0.0%	2 3.8%	2 2.9%	1 11.1%	2 9.1%	3 9.7%	8 6.1%
返答なし	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 1.9%	1 1.5%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.8%
計	7 100%	25 100%	32 100%	15 100%	53 100%	68 100%	9 100%	22 100%	31 100%	131 100%

### 3. 物的環境

#### 1) 歩行補助具等（e1151）の使用状況

歩行補助具等の使用状況を表 63 に示す。

総計で「なし」は 1641 名中 670 名 (40.8%)、「あり」は 971 名 (59.2%) であった。要介護度が進むにつれて「なし」が減少し、「あり」が増える傾向が認められた。

#### 2) 家の周りの環境（e160）

家の周りの環境について坂道、交通量が多い、などの問題のために、歩きにくいことはあるかについて表 64 に示す。

総計でみると「なし」は 1641 名中 1097 名 (66.8%)、「あり」は 483 名 (29.4%) であった。要介護度との関連は著明ではなかった。

表 63 歩行補助具等の使用状況

	要支援			要介護 1			要介護 2			総計
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
なし	60 名 71.4%	159 名 45.8%	219 名 50.8%	97 名 50.5%	209 名 34.0%	306 名 38.0%	36 名 31.9%	109 名 37.5%	145 名 35.9%	670 名 40.8%
あり	24 28.6%	188 54.2%	212 49.2%	95 49.5%	405 66.0%	500 62.0%	77 68.1%	182 62.5%	259 64.1%	971 59.2%
返答なし	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
計	84 100%	347 100%	431 100%	192 100%	614 100%	806 100%	113 100%	291 100%	404 100%	1641 100%

表 64 家の周りの環境坂道、交通量が多い、などの問題のために、歩きにくいことはあるか？

	要支援			要介護 1			要介護 2			総計
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
なし	66 名 78.6%	244 名 70.3%	310 名 71.9%	135 名 70.3%	410 名 66.8%	545 名 67.6%	64 名 56.6%	178 名 61.2%	242 名 59.9%	1097 名 66.8%
あり	17 20.2%	91 26.2%	108 25.1%	54 28.1%	184 30.0%	238 29.5%	44 38.9%	93 32.0%	137 33.9%	483 29.4%
返答なし	1 1.2%	12 3.5%	13 3.0%	3 1.6%	20 3.3%	23 2.9%	5 4.4%	20 6.9%	25 6.2%	61 3.7%
計	84 100%	347 100%	431 100%	192 100%	614 100%	806 100%	113 100%	291 100%	404 100%	1641 100%

## D. 総括的考察

以上各項目について個別的な考察を加えてきたので、ここでは総合的、総括的な点に限って考察を加えたい。

本研究の対象は地方中都市の要介護認定後期高齢者（要支援、要介護1、要介護2）である。

また目的は生活機能、特に「活動」の向上に重点をおいた病棟・居室等でのリハビリテーションと在宅自立支援の必要度を把握し有効なプログラムの確立に資することである。

上記の見地から調査結果を検討し、以下のことが確認された。これらはいずれも、各調査項目の意義・特性、相対的難易度などを示すと同時に、対象群（要支援、要介護1、要介護2）別の、また男女別の難易度等を示し、各対象群の生活機能の現状を明らかにするものである。

### 1. 「活動」の自立度（「活動」の「質」）

歩行移動については「屋外歩行」－「階段昇降」－「床からの立ち上がり」－「屋内歩行」で困難になっていくことが確認された。また日常生活行為については各項目内で「普遍的自立」がまず困難になり、次いで「環境限定型」に及ぶことが確認された。

これは「活動」の「質」の低下を敏感に早期発見するための重要な知見であり、大きな実践的意義をもつものである。

### 2. 生活の活発さ（「活動」の「量」）

種々の指標で生活の活発さ（「活動」の「量」）を測定すると、もっとも活発さの高いランクは「1日の時間の過ごし方」で

2.5%～9.7%（総計4.9%）、「1日の体の活動量」で5.7%～18.8%（総計10.4%）と、共に著しく低かった。

外出回数もトップランクは14.6%～32.7%（総計22.0%）と低く、以前と比べて外出回数が減少した主なきっかけは「健康状態」と「活動」の「質」の低下であった。外出手段は要介護度が進むほど「歩いて」が減少し「家族の車」が増加した。

### 3. 「参加」

対象群の特性からみて「仕事」に従事している人が少ないことは予想されたとおりであったが、逆に後期高齢者の要介護認定でも何らかの仕事を行っているものが1.5%～6.7%（総計3.3%）いたことが注目に値する。趣味・スポーツもこれに似て「十分にしている」は1.2%～6.7%（総計3.4%）と低かったが、「ある程度している」を加えると11.6%～33.4%（総計21.4%）と要支援者では3分の1がある程度は行っていた。町内会等の地域への参加はこの中間であった。

家事についての家庭内役割低下は、例えば調理についてみると、一応の実行者は14.4%～57.3%（総計45.3%）と上記より多かった。男女差は著明であるが、男性でも実行している者が決して少なくなく、女性でも「以前からしていなかった」者もいるなど、単純ではなかった。

### 4. 「心身機能」

体のどこかに痛みを持つ者は総計で26.1%、心や体の不自由のある者は84.9%と多く、また歩行困難をもつものも総計で

87.2%と多かった。

## 5. 健康状態

現在通院しているものは9割以上で、要介護度による差はみられなかった。病名としては高血圧、狭心症・不整脈など直接「活動」の低下をきたさないものが多かった。

## 6. 環境因子

制度的・サービスの環境因子であるリハビリテーションについてみると要介護認定前に「リハビリテーション前置」が望ましいとされているにもかかわらず、実態は3割弱が受けた事があるにとどまっていた。

要介護認定後のリハビリテーションを受けたものも4分の1以下にとどまった。両者ともその内容は病棟・居室棟のリハビリテーションと在宅自立支援の見地からはきわめて不十分であった。

人的環境である同居家族の構成に5年以内に変化のあったものは約2割あり、うち総計で8.6%は配偶者が死亡していた。またこれは外出・家事などを減少させる影響をもっていた。

最近5年間に引越ししたものは8%で、これも外出・家事などをかなり減少させていた。

物理的環境因子である歩行補助具は約6割のものが使用していた。また家の周りの環境によって歩きにくいとしているものは約3割であった。

## E. 結論

病棟・居室棟でのリハビリテーションと在宅自立支援の有効なプログラム確立の観点から、地方中都市における要介護認定後期高齢者（要支援、要介護1、要介護2）の生活機能の実態を調査し、「活動」の自立度（「活動」の「質」）、生活の活発さ（「活動」の「量」）、「参加」のそれぞれの多数の項目において著しい低下がみられ、それが概して要介護度と並行して進行することが確認された。その他「心身機能」「健康状態」「環境因子」にも様々な問題が認められた。特に「リハビリテーション前置」も事後的なリハビリテーションもきわめて不十分であることが明らかとなった。

これにより効果的な病棟・居室棟でのリハビリテーションと在宅自立支援サービス構築のための重要な基礎データを得ることができた。

## F. 健康危険情報

特になし

## G. 研究発表

### 1. 論文発表

- ・大川弥生：真のバリアフリー環境とは何か；リハビリテーションの視点からみた歩行の意義。病院建築. 143：8-11, 2004

## 在宅生活高齢者の生活機能に関する研究

分担研究者 上田 敏 日本障害者リハビリテーション協会 顧問

主任研究者 大川弥生 国立長寿医療センター 研究所 部長

### 研究要旨

在宅自立支援の対象となりうる高齢者の生活機能の実態を把握し、支援技術・プログラムの開発また行政サービス・システムの立案に資することを目的として、同一自治体の非要介護認定高齢身体障害者手帳なし（893名）、同あり（92名）、および要介護認定者（189名）の3群、計1,174について、ICF（国際生活機能分類）モデルに従い、歩行・移動および身の回り行為等の高齢者の「活動」、家庭内役割、仕事等の「参加」、また生活の活発さ、「健康状態」、「心身機能」、「環境因子」の状況を調査し、グループ間及び各種のサブグループ間で比較した。

結果として、要介護認定を受けていない、一応「健康」であり「自立」しているとされる高齢者においても、活動（屋外歩行、自宅内歩行、身の回り行為、等）にすでにあきらかな制限を受けている者が決して少なくなく、特に活動の「普遍的自立」（日常出会うどのような環境においても問題なく自立している）に達しえず「環境限定型自立」（自宅内とその周辺などの限られた環境のみでは自立している）にとどまる者がかなり多いことが確認された。また「参加」等についても多くの問題点が確認された。

これは一見健康な高齢者群にも介護予防としての在宅自立支援あるいはリハビリテーションの対象となりうる生活機能低下者や生活機能低下のハイリスク者が意外に多数存在していることを示すものであり、介護予防も含めた在宅自立支援のための制度設計の、また住民自身への普及啓発のための重要な基礎データを得ることができた。

### A. 研究目的

WHO・ICFモデルに立った、個別性重視の医療と介護の連携による在宅自立支援のあり方を明らかにするには、対象者の生活機能の実態を把握し、それを支援技術・プログラムの開発、また行政サービス等のシステムの立案に生かすことが重要である。

そこで現在の行政サービスとの関係で高齢者を大きくグループ化し、①要介護認定を受けていず、身体障害者手帳（以下身障手帳又は手帳と略す）を所持しない者、②要介護認定を受けていないが身障手帳を有している者、③要介護認定者、の3つのグループについて、同一自治体において同一の調査内容で生活機

能の状態の実態を調査し、比較検討した。

なお①は一応「健康」で「自立」とみなしうる群であり、②は介護を要するほどの「活動」の低下は生じていないが、身体障害者手帳の認定条件を満たす程度の「心身機能低下」を持つ群と考えることができる。

## B. 研究方法

1町（人口約 11,400 人、高齢者人口 約 2,600 人）の 65 才以上の在宅生活高齢者を対象として、生活機能について調査し、①非要介護認定者のうち身障手帳非所持者、②同身障手帳保持者、③要介護認定者の 3 群で分析を行った。

### 1. 対象

非要介護認定者については在宅生活高齢者の内、非要介護認定者 1,000 名を年齢階層別・性別にランダム抽出した。回答は 992 名（回収率 99.2%）から得られた。このうち性別不明、年齢不明の 7 名を除いた 985 名を分析対象とした。そのうち身障手帳非保持者は 893 名（男性 444 名、女性 449 名、平均年齢； $74.3 \pm 5.6$ 、前期高齢者 486 名、後期高齢者 407 名）、身障手帳保持者は 92 名（男性 52 名、女性 40 名、平均年齢  $74.3 \pm 5.3$ ；前期高齢者 45 名、後期高齢者 47 名）であった。

要介護認定者については、調査当時介護保険改定後の新予防給付の対象者として想定されていた要支援～要介護 2 で、入院・施設入所者を除いた 200 名を年齢階層別・性別にランダム抽出した。回答は 189 名（回収率 94.5%）から得られた。このうち 65 歳未満を除いた 180 名（男性 55 名、女性 125 名、平均年齢  $80.5 \pm 6.8$  才；前期高齢者 36 名、後期高齢者 144 名）を分析対象とした。

## 2. 調査方法

調査は、郵送留め置き訪問回収により行った。

調査項目は、WHO・ICFモデルに基づき生活機能の 3 つのレベルのうち、「活動」「参加」に重点をおき、また健康状態、環境因子についても調査した。

「活動」については、自立度（「活動」の「質」）と生活の活発さ（「活動」の「量」）の両面から調査した。これはこれらの「質」と「量」とを「掛け合わせ」たものが全体としての「生活の活発性」であり、それが低下することが「廃用症候群」を引き起こし、生活機能全般の低下に及ぶことがしばしばみられるからである。

### （倫理面の配慮）

主任研究者の所属機関の倫理委員会にて審査を受け、研究の承認を受けた。また当該自治体の個人情報保護・管理等の規則に従い、本研究について主任研究者との間で協定書を締結している。

## C. 結果と考察

以下、「活動」、「参加」、「健康状態」、「環境因子」、そして介護予防上重視されている廃用症候群との関連の深い「活動」の「量」的側面をみる「生活の活発さ」について、3 群（非要介護認定者のうちの身障手帳の所持なしの群、非要介護認定者で身障手帳所持ありの群、要介護認定者）に分けて、前期高齢者・後期高齢者でそれぞれ集計した。

### 1. 活動の状況

#### 1) 屋外歩行

まず屋外歩行の現状をみると、前期高齢者では表1-1に示すように、「普遍的自立」である「遠くへも一人で歩いている」は、非要介護認定者のうち身障手帳なしでは57.8%、手帳あり35.6%、要介護認定者では11.1%と、約6割、3.5割、1割と大きな差を持って順に少なくなっている。

「環境限定型自立」である「近くであれば一人で歩いている」は身障手帳なしでは30.9%、手帳あり42.2%、また要介護認定者では44.4%と、手帳ありと要介護認定者は4割強とほぼ同じであった。

「自立計」すなわち「遠くへも一人で歩いている」と「近くであれば一人で歩いている」の両者を合計したものは、身障手帳なしでは88.7%、手帳あり77.7%、また要介護認定者では55.6%であり、3者間に差はあるが、「普遍的自立」である「遠くへも一人で歩いている」だけについてみた場合よりは差が少なかった。

これに対し非自立すなわち介護を必要とする状態をみると、まず「誰かと一緒に歩いている」は身障手帳なしでは5.3%、手帳あり8.9%、また要介護認定者では13.9%であり、「外は歩いていない」は身障手帳なしでは3.7%、手帳あり11.1%、また要介護認定者では27.8%であった。

この2者を合計した「非自立計」は身障手帳なしでは9.1%、手帳あり20.0%、また要介護認定者では41.7%と、1割、2割、4割と順に多くなっていた。

次に後期高齢者では表1-2に示すように、「普遍的自立」である「遠くへも一人で歩いている」は身障手帳なしでは37.1%、手帳あり36.2%、また要介護認定者では8.3%と、

前期高齢者と異なり身障手帳ありとなしの両群で同程度であり、それも前期高齢者の手帳ありと同じ約3.5割であった。「環境限定型自立」である「近くであれば一人で歩いている」は身障手帳なしでは51.1%、手帳あり40.4%、また要介護認定者では49.3%であった。

両者を合計した「自立計」は身障手帳なしでは88.2%、手帳あり76.6%、また要介護認定者では57.6%と、3群ともに前期高齢者とほぼ同じであった。

これに対し非自立すなわち介護を必要とする状態である、「誰かと一緒に歩いている」は7.6%、10.6%、15.3%であり、「外は歩いていない」は2.7%、10.6%、24.3%であった。

合計すると「非自立計」は、身障手帳なしでは10.3%、手帳あり21.3%、また要介護認定者では39.6%と、前期高齢者とほぼ同様であった。

前・後期で比較すると、「自立計」の割合は3群ともに大きな差はない。しかし身障手帳なしでは前期では普遍的自立は57.8%、環境限定型自立は30.9%に対し、後期高齢者では37.1%対51.1%と逆転している。これは同じ自立の中でも普遍的自立と環境限定型自立とを区別することに大きな意味があることを示すものである。

一方で身障手帳ありと要介護認定者では、自立の中での「普遍的自立」と「環境限定型自立」の比率は前・後期ともに差はなかった。

## 2) 自宅内歩行

自宅内歩行は、前期高齢者では表2-1に示すように、自立のうち「普遍的自立」に準ずる「何もつかまらずに歩いている」は非要



介護認定者のうち身障手帳なしでは 89.7%、手帳あり 77.8%、また要介護認定者では 36.1%と著明な差があった。「環境限定型自立」に準ずる「よく家具や壁を伝わっている」は身障手帳なしでは 5.3%、手帳あり 8.9%、また要介護認定者では 47.2%であった。

両者を合計した「自立計」は、身障手帳なしでは 95.1%、手帳あり 86.7%、また要介護認定者では 83.3%であった。このように「自立者計」は 8.5～9.5 割と 1 割弱の差にとどま

るが、「普遍的自立」のみをみた場合の差は大きく、ここでも「普遍的自立」と「環境限定型自立」とを分けてみることの意義が明らかであった。

これに対し非自立すなわち介護を必要とする状態である、「誰かと一緒にあれば歩いている」は 1.0%、6.7%、8.3%であり、「ほとんど四つ這いなど」は 0%、0%、0%であり、「ほとんどベッドや布団の上の生活」は 0.4%、0%、5.6%であった。

表 1-1 屋外歩行（前期高齢者）

	非要介護認定者						要介護認定者		
	手帳なし			手帳あり			男	女	計
	男	女	計	男	女	計			
遠くへも一人で歩いている	154名 61.8%	127名 53.6%	281名 57.8%	12名 42.9%	4名 23.5%	16名 35.6%	1名 6.3%	3名 15.0%	4名 11.1%
近くであれば一人で歩いている	69 27.7%	81 34.2%	150 30.9%	11 39.3%	8 47.1%	19 42.2%	6 37.5%	10 50.0%	16 44.4%
誰かと一緒にあれば歩いている	13 5.2%	13 5.5%	26 5.3%	0 0.0%	4 23.5%	4 8.9%	3 18.8%	2 10.0%	5 13.9%
外は歩いていない	12 4.8%	6 2.5%	18 3.7%	4 14.3%	1 5.9%	5 11.1%	6 37.5%	4 20.0%	10 27.8%
返答なし	1 0.4%	10 4.2%	11 2.3%	1 3.6%	0 0.0%	1 2.2%	0 0.0%	1 5.0%	1 2.8%
計	249 100%	237 100%	486 100%	28 100%	17 100%	45 100%	16 100%	20 100%	36 100%

表 1-2 屋外歩行（後期高齢者）

	非要介護認定者						要介護認定者		
	手帳なし			手帳あり			男	女	計
	男	女	計	男	女	計			
遠くへも一人で歩いている	82名 42.1%	69名 32.5%	151名 37.1%	11名 45.8%	6名 26.1%	17名 36.2%	2名 5.1%	10名 9.5%	12名 8.3%
近くであれば一人で歩いている	99 50.8%	109 51.4%	208 51.1%	8 33.3%	11 47.8%	19 40.4%	24 61.5%	47 44.8%	71 49.3%
誰かと一緒にあれば歩いている	9 4.6%	22 10.4%	31 7.6%	2 8.3%	3 13.0%	5 10.6%	5 12.8%	17 16.2%	22 15.3%
外は歩いていない	1 0.5%	10 4.7%	11 2.7%	3 12.5%	2 8.7%	5 10.6%	8 20.5%	27 25.7%	35 24.3%
返答なし	4 2.1%	2 0.9%	6 1.5%	0 0.0%	1 4.3%	1 2.1%	0 0.0%	4 3.8%	4 2.8%
計	195 100%	212 100%	407 100%	24 100%	23 100%	47 100%	39 100%	105 100%	144 100%

3者を合計した「非自立者計」は、非要介護認定者のうち身障手帳なしでは1.4%、手帳あり6.7%、また要介護認定者では13.9%と明らかに増加していった。

次に、後期高齢者では表2-2に示すように、「普遍的自立」に準ずる「何もつかまらず

に歩いている」は、身障手帳なしでは80.1%、手帳あり76.6%、また要介護認定者では39.6%であり、「環境限定型自立」に準ずる「よく家具や壁を伝わっている」は身障手帳なしでは13.3%、手帳あり12.8%、また要介護認定者では41.7%であった。

表2-1 自宅内歩行（前期高齢者）

	非要介護認定者						要介護認定者		
	手帳なし			手帳あり			男	女	計
	男	女	計	男	女	計			
何もつかまらずに歩いている	232名 93.2%	204名 86.1%	436名 89.7%	23名 82.1%	12名 70.6%	35名 77.8%	7名 43.8%	6名 30.0%	13名 36.1%
よく家具や壁を伝わっている	9 3.6%	17 7.2%	26 5.3%	2 7.1%	2 11.8%	4 8.9%	6 37.5%	11 55.0%	17 47.2%
誰かと一緒に歩いている	3 1.2%	2 0.8%	5 1.0%	1 3.6%	2 11.8%	3 6.7%	1 6.3%	2 10.0%	3 8.3%
ほとんど四つ這いなど	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
ほとんどベッドや布団の上の生活	1 0.4%	1 0.4%	2 0.4%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 6.3%	1 5.0%	2 5.6%
返答なし	4 1.6%	13 5.5%	17 3.5%	2 7.1%	1 5.9%	3 6.7%	1 6.3%	0 0.0%	1 2.8%
計	249 100%	237 100%	486 100%	28 100%	17 100%	45 100%	16 100%	20 100%	36 100%

表2-2 自宅内歩行（後期高齢者）

	非要介護認定者						要介護認定者		
	手帳なし			手帳あり			男	女	計
	男	女	計	男	女	計			
何もつかまらずに歩いている	164名 84.1%	162名 76.4%	326名 80.1%	21名 87.5%	15名 65.2%	36名 76.6%	20名 51.3%	37名 35.2%	57名 39.6%
よく家具や壁を伝わっている	20 10.3%	34 16.0%	54 13.3%	2 8.3%	4 17.4%	6 12.8%	14 35.9%	46 43.8%	60 41.7%
誰かと一緒に歩いている	3 1.5%	5 2.4%	8 2.0%	1 4.2%	0 0.0%	1 2.1%	3 7.7%	8 7.6%	11 7.6%
ほとんど四つ這いなど	0 0.0%	1 0.5%	1 0.2%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	4 3.8%	4 2.8%
ほとんどベッドや布団の上の生活	1 0.5%	0 0.0%	1 0.2%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 2.6%	6 5.7%	7 4.9%
返答なし	7 3.6%	10 4.7%	17 4.2%	0 0.0%	4 17.4%	4 8.5%	1 2.6%	4 3.8%	5 3.5%
計	195 100%	212 100%	407 100%	24 100%	23 100%	47 100%	39 100%	105 100%	144 100%

両者を合計した「自立計」は身障手帳なしでは93.4%、手帳あり89.4%、また要介護認定者では81.3%であった。

これに対し「非自立計」は、身障手帳なしでは2.4%、手帳あり2.1%、また要介護認定者では15.3%であり、身障手帳ありでは前期高齢者よりも少ないが、その他は若干後期高齢者が多めであった。

前期高齢者と後期高齢者とを比較すると、ほぼ屋外歩行と同様に、身障手帳なしでのみ前期に比べ後期で「普遍的自立」の比率が減少していた。また「自立計」は前期では95～83%、後期93～81%とと3群間、年齢層間の差は少ないが、「普遍的自立」だけを3群で比較すると要介護認定者ではは少なく、他の2群との差は著しかった。

このように、屋外歩行と同様「普遍的自立」

と「環境限定型自立」との差を明確にすることで、比較的軽度な「活動」の低下も鋭敏に検知することができるといえよう。

## 2. 歩行困難の状況

### 1) 歩く難しさ

「歩く難しさ」の状況についてみると、前期高齢者では、表3-1に示すように、「あり」は身障手帳なしでは32.3%、手帳あり48.9%、また要介護認定者では86.1%と順次多くなっている。

次に、後期高齢者では、表3-2に示すように、「あり」は身障手帳なしでは49.9%、手帳あり55.3%、また要介護認定者では94.4%と、手帳ありとなしとの差がやや縮まった他は前期と同様に順次多くなっていた。

表3-1 歩く難しさ（前期高齢者）

	非要介護認定者						要介護認定者		
	手帳なし			手帳あり			男	女	計
	男	女	計	男	女	計			
なし	178名 71.5%	137名 57.8%	315名 64.8%	14名 50.0%	9名 52.9%	23名 51.1%	3名 18.8%	2名 10.0%	5名 13.9%
あり	64 25.7%	93 39.2%	157 32.3%	14 50.0%	8 47.1%	22 48.9%	13 81.3%	18 90.0%	31 86.1%
返答なし	7 2.8%	7 3.0%	14 2.9%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
計	249 100%	237 100%	486 100%	28 100%	17 100%	45 100%	16 100%	20 100%	36 100%

表3-2 歩く難しさ（後期高齢者）

	非要介護認定者						要介護認定者		
	手帳なし			手帳あり			男	女	計
	男	女	計	男	女	計			
なし	101名 51.8%	87名 41.0%	188名 46.2%	10名 41.7%	10名 43.5%	20名 42.6%	3名 7.7%	5名 4.8%	8名 5.6%
あり	84 43.1%	119 56.1%	203 49.9%	13 54.2%	13 56.5%	26 55.3%	36 92.3%	100 95.2%	136 94.4%
返答なし	10 5.1%	6 2.8%	16 3.9%	1 4.2%	0 0.0%	1 2.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
計	195 100%	212 100%	407 100%	24 100%	23 100%	47 100%	39 100%	105 100%	144 100%

前期・後期を比較すると、後期高齢者で3群とも歩行の難しさを感じる人が多かったが、特に非要介護認定者手帳ありで前期に比し後期での増加が著明であった。

## 2) 歩行困難の理由

歩行困難の理由についてみると、回答者別では表4-1、4-2に示すように前・後期とも複数回答及び「返答なし」が非常に多かった。そのうち「返答なし」は前問で「歩く難しさなし」と返答したものが主であると考えられる。

また複数回答者は前・後期ともに身障手帳なし、あり、要介護認定者の順に多くなっており、また3群ともにそれぞれ前期と比べ後期で多い。特に要介護認定者では、前期で5割、後期で7割をも占めている。このように歩行の困難という「活動制限」は様々な「心身機能」低下から生じることがわかる。

以上から「返答なし」を除いた項目別（総計は必ずしも100%にならない）にみると、前期高齢者では、表4-3に示すように、歩行困難の理由は、身障手帳なしでは「足の関節の痛み」10.7%、「足の力がおちた」8.8%、

表4-1 歩行困難の理由：回答者別（前期高齢者）

	非要介護認定者						要介護認定者		
	手帳なし			手帳あり			男	女	計
	男	女	計	男	女	計			
足の力がおちた	8名 3.2%	13名 5.5%	21名 4.3%	4名 14.3%	1名 5.9%	5名 11.1%	0名 0.0%	2名 10.0%	2名 5.6%
足の関節の痛み	7 2.8%	14 5.9%	21 4.3%	2 7.1%	1 5.9%	3 6.7%	0 0.0%	1 5.0%	1 2.8%
腰痛	6 2.4%	9 3.8%	15 3.1%	1 3.6%	1 5.9%	2 4.4%	1 6.3%	0 0.0%	1 2.8%
疲れやすい	4 1.6%	5 2.1%	9 1.9%	1 3.6%	0 0.0%	1 2.2%	1 6.3%	0 0.0%	1 2.8%
つまづき易い	3 1.2%	4 1.7%	7 1.4%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 6.3%	0 0.0%	1 2.8%
歩く速さが遅い	3 1.2%	2 0.8%	5 1.0%	1 3.6%	0 0.0%	1 2.2%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
目が見えにくい	1 0.4%	1 0.4%	2 0.4%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
ふらつく	1 0.4%	0 0.0%	1 0.2%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	3 15.0%	3 8.3%
耳が聞こえにくい	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
その他	3 1.2%	4 1.7%	7 1.4%	1 3.6%	1 5.9%	2 4.4%	1 6.3%	0 0.0%	1 2.8%
複数回答	21 8.4%	33 13.9%	54 11.1%	3 10.7%	4 23.5%	7 15.6%	8 50.0%	11 55.0%	19 52.8%
返答なし	192 77.1%	152 64.1%	344 70.8%	15 53.6%	9 52.9%	24 53.3%	4 25.0%	3 15.0%	7 19.4%
計	249 100%	237 100%	486 100%	28 100%	17 100%	45 100%	16 100%	20 100%	36 100%

「腰痛」8.0%、「疲れやすい」6.0%であった。身障手帳ありでは「足の関節の痛み」17.8%、「足の力がおちた」17.8%、「腰痛」13.3%、「歩く速さが遅い」11.1%であった。要介護認定者では「足の関節の痛み」36.1%、「足の力がおちた」33.3%、「疲れやすい」27.8%、「腰痛」27.8%であった。いずれの項目においても手帳なし・手帳あり・要介護認定者の順に多くなっていた。

次に、後期高齢者では、表4-4に示すように、身障手帳なしでは「足の関節の痛み」19.4%、「腰痛」18.4%、「足の力がおちた」17.4%、「疲れやすい」14.3%、「歩く早さが

遅い」14.3%であった。身障手帳ありでは「足の関節の痛み」23.4%、「歩く早さが遅い」27.7%、「足の力がおちた」21.3%、「腰痛」17.0%、「つまづき易い」17.0%であった。要介護認定者では「足の力がおちた」47.2%、「足の関節の痛み」37.5%、「腰痛」31.3%、「つまづき易い」30.6%であった。

前期高齢者と比べ全般的に各項目の比率が高い反面、3群間の差はそれほど著明ではなかった。

また通常考えられ易い運動機能面だけでなく、「耳が聞こえにくい」、「目が見えない」が

表4-2 歩行困難の理由：回答者別（後期高齢者）

	非要介護認定者						要介護認定者		
	手帳なし			手帳あり			男	女	計
	男	女	計	男	女	計			
腰痛	7名 3.6%	9名 4.2%	16名 3.9%	0名 0.0%	0名 0.0%	0名 0.0%	0名 0.0%	2名 1.9%	2名 1.4%
足の関節の痛み	10 5.1%	5 2.4%	15 3.7%	1 4.2%	1 4.3%	2 4.3%	1 2.6%	3 2.9%	4 2.8%
疲れやすい	6 3.1%	7 3.3%	13 3.2%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 1.9%	2 1.4%
足の力がおちた	8 4.1%	4 1.9%	12 2.9%	1 4.2%	1 4.3%	2 4.3%	3 7.7%	6 5.7%	9 6.3%
歩く速さが遅い	2 1.0%	8 3.8%	10 2.5%	0 0.0%	1 4.3%	1 2.1%	0 0.0%	2 1.9%	2 1.4%
つまづき易い	1 0.5%	5 2.4%	6 1.5%	0 0.0%	1 4.3%	1 2.1%	1 2.6%	1 1.0%	2 1.4%
耳が聞こえにくい	1 0.5%	3 1.4%	4 1.0%	1 4.2%	0 0.0%	1 2.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
ふらつく	1 0.5%	1 0.5%	2 0.5%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 1.0%	1 0.7%
目が見えにくい	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 2.6%	0 0.0%	1 0.7%
その他	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 4.2%	0 0.0%	1 2.1%	3 7.7%	3 2.9%	6 4.2%
複数回答	41 21.0%	69 32.5%	110 27.0%	8 33.3%	9 39.1%	17 36.2%	25 64.1%	73 69.5%	98 68.1%
返答なし	118 60.5%	101 47.6%	219 53.8%	12 50.0%	10 43.5%	22 46.8%	5 12.8%	12 11.4%	17 11.8%
計	195 100%	212 100%	407 100%	24 100%	23 100%	47 100%	39 100%	105 100%	144 100%

表4-3 歩行困難の理由：項目別（前期高齢者）

	非要介護認定者						要介護認定者		
	手帳なし			手帳あり			男	女	計
	男	女	計	男	女	計			
足の関節の痛み	19名 7.6%	33名 13.9%	52名 10.7%	4名 14.3%	4名 23.5%	8名 17.8%	6名 37.5%	7名 35.0%	13名 36.1%
足の力が落ちた	19 7.6%	24 10.1%	43 8.8%	5 17.9%	3 17.6%	8 17.8%	5 31.3%	7 35.0%	12 33.3%
腰痛	14 5.6%	25 10.5%	39 8.0%	4 14.3%	2 11.8%	6 13.3%	5 31.3%	5 25.0%	10 27.8%
疲れやすい	12 4.8%	17 7.2%	29 6.0%	1 3.6%	2 11.8%	3 6.7%	2 12.5%	8 40.0%	10 27.8%
歩く速さが遅い	11 4.4%	16 6.8%	27 5.6%	2 7.1%	3 17.6%	5 11.1%	3 18.8%	3 15.0%	6 16.7%
つまづき易い	8 3.2%	17 7.2%	25 5.1%	0 0.0%	3 17.6%	3 6.7%	4 25.0%	5 25.0%	9 25.0%
目が見えにくい	5 2.0%	8 3.4%	13 2.7%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 5.0%	1 2.8%
耳が聞こえにくい	4 1.6%	5 2.1%	9 1.9%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 12.5%	0 0.0%	2 5.6%
ふらつく	2 0.8%	5 2.1%	7 1.4%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 12.5%	8 40.0%	10 27.8%
その他	5 2.0%	4 1.7%	9 1.9%	1 3.6%	1 5.9%	2 4.4%	3 18.8%	1 5.0%	4 11.1%
計	99 39.8%	154 65.0%	253 52.1%	17 60.7%	18 105.9%	35 77.8%	32 200.0%	45 225.0%	77 213.9%

表4-4 歩行困難の理由：項目別（後期高齢者）

	非要介護認定者						要介護認定者		
	手帳なし			手帳あり			男	女	計
	男	女	計	男	女	計			
足の関節の痛み	31名 15.9%	48名 22.6%	79名 19.4%	4名 16.7%	7名 30.4%	11名 23.4%	10名 25.6%	44名 41.9%	54名 37.5%
腰痛	26 13.3%	49 23.1%	75 18.4%	2 8.3%	6 26.1%	8 17.0%	10 25.6%	35 33.3%	45 31.3%
足の力が落ちた	28 14.4%	43 20.3%	71 17.4%	4 16.7%	6 26.1%	10 21.3%	19 48.7%	49 46.7%	68 47.2%
疲れやすい	19 9.7%	39 18.4%	58 14.3%	3 12.5%	1 4.3%	4 8.5%	6 15.4%	23 21.9%	29 20.1%
歩く速さが遅い	21 10.8%	37 17.5%	58 14.3%	5 20.8%	8 34.8%	13 27.7%	13 33.3%	19 18.1%	32 22.2%
つまづき易い	14 7.2%	27 12.7%	41 10.1%	1 4.2%	7 30.4%	8 17.0%	11 28.2%	33 31.4%	44 30.6%
耳が聞こえにくい	10 5.1%	12 5.7%	22 5.4%	5 20.8%	1 4.3%	6 12.8%	4 10.3%	12 11.4%	16 11.1%
ふらつく	9 4.6%	8 3.8%	17 4.2%	1 4.2%	3 13.0%	4 8.5%	6 15.4%	30 28.6%	36 25.0%
目が見えにくい	7 3.6%	6 2.8%	13 3.2%	2 8.3%	0 0.0%	2 4.3%	5 12.8%	13 12.4%	18 12.5%
その他	2 1.0%	6 2.8%	8 2.0%	1 4.2%	0 0.0%	1 2.1%	7 17.9%	12 11.4%	19 13.2%
計	167 85.6%	275 129.7%	442 108.6%	28 116.7%	39 169.6%	67 142.6%	91 233.3%	270 257.1%	361 250.7%

歩行困難の原因となっていることが、後期高齢者は身障手帳なしで3～5%あり、身障手帳ありおよび要介護認定者でほぼ1割強であることは留意すべきことと考えられる。

これらの結果は、歩行困難の原因としては複数のものが関与していることが多く、運動機能以外の問題が関与することもあることを留意して聴取することの重要性を示唆するものである。

### 3. 身の回り行為

#### 1) 身の回り行為の不自由の有無

身の回りのことで少しでも不自由な行為があるかどうかについてみると、前期高齢者では、表5-1に示すように、「(不自由)あり」は非要介護認定者のうち身障手帳なしでは3.1%、手帳あり15.6%、また要介護認定者では44.4%であり、後期高齢者では表5-2に示すように、7.6%、25.5%、38.2%であり、

このように3群間での差は著明であった。

ただ前期と後期との比較では、非要介護認定者では後期高齢者で不自由がある人が明らかに多くなっているが、要介護認定者ではむしろ前期高齢者の方が多い傾向がみられた。

#### 2) 身の回り行為の介護の有無

更に身の回りのことで人に助けられている行為があるかをみると、前期高齢者では、表6-1に示すように、「(介護)あり」は非要介護認定者のうち身障手帳なしでは0.8%、手帳あり4.4%、また要介護認定者では19.4%であった。また、後期高齢者では、表6-2に示すように、2.0%、6.4%、9.7%であった。いずれも3群間の差が明らかであった。

前期高齢者と後期高齢者とを比較すると、非要介護認定者では後期高齢者で身の回り行為を助けられている人が多くなっているが、要介護認定者では逆に前期高齢者の方が多かった。

表5-1 身の回り行為の不自由(前期高齢者)

	非要介護認定者						要介護認定者		
	手帳なし			手帳あり			男	女	計
	男	女	計	男	女	計			
あり	6名 2.4%	9名 3.8%	15名 3.1%	4名 14.3%	3名 17.6%	7名 15.6%	7名 43.8%	9名 45.0%	16名 44.4%
なし	243 97.6%	228 96.2%	471 96.9%	24 85.7%	14 82.4%	38 84.4%	9 56.3%	11 55.0%	20 55.6%
計	249 100%	237 100%	486 100%	28 100%	17 100%	45 100%	16 100%	20 100%	36 100%

表5-2 身の回り行為の不自由(後期高齢者)

	非要介護認定者						要介護認定者		
	手帳なし			手帳あり			男	女	計
	男	女	計	男	女	計			
あり	13名 6.7%	18名 8.5%	31名 7.6%	6名 25.0%	6名 26.1%	12名 25.5%	20名 51.3%	35名 33.3%	55名 38.2%
なし	182 93.3%	194 91.5%	376 92.4%	18 75.0%	17 73.9%	35 74.5%	19 48.7%	70 66.7%	89 61.8%
計	195 100%	212 100%	407 100%	24 100%	23 100%	47 100%	39 100%	105 100%	144 100%

#### 4) 畳や床からの立ち上がり

移動行為の一つであり、特に日本家屋では重要となる畳や床からの立ち上がりの状況についてみると、前期高齢者では、表7-1に示すように、「不自由はない」は非要介護認定者のうち身障手帳なしでは84.2%、手帳あり75.6%、また要介護認定者では13.9%であり、次に「床や家具に手をついている」は同じく10.5%、13.3%、63.9%であった。このように「不自由はない」については3群間の差、特に要介護認定者で低いことが著明であった。しかしこの2つを合計した「自立計」で見ると、94.7%、88.9%、77.8%であり差は少なくなかった。このような点でも前にみたように、「普遍的自立」に準ずる「不自由はない」と「環境限定型自立」に準ずる「床や家具に手をついて」とを分けてみるのが、僅かな自

立度低下をも敏感に検知する上で有効であった。

これに対し、非自立である「助けてもらっている」は0.4%、4.4%、11.1%であり、「行っていない」は0.4%、2.2%、8.3%であった。

次に、後期高齢者では、表7-2に示すように、「不自由はない」は72.5%、63.8%、20.1%、「床や家具に手をついている」は、22.4%、23.4%、61.1%であった。合計すると94.9%、87.2%、81.2%であり、ここでも前期高齢者と全く同じに同じ自立度でも「不自由はない」と「床や家具に手をついている」とを分けてみることの意義が明らかであった。

これに対し非自立である「助けてもらっている」は0.7%、6.4%、8.3%であり、「行っていない」は0%、0%、4.2%であった。

表6-1 身の回り行為の介護の有無（前期高齢者）

	非要介護認定者						要介護認定者		
	手帳なし			手帳あり			男	女	計
	男	女	計	男	女	計			
あり	1名 0.4%	3名 1.3%	4名 0.8%	2名 7.1%	0名 0.0%	2名 4.4%	5名 31.3%	2名 10.0%	7名 19.4%
なし	248 99.6%	234 98.7%	482 99.2%	26 92.9%	17 100.0%	43 95.6%	11 68.8%	18 90.0%	29 80.6%
計	249 100%	237 100%	486 100%	28 100%	17 100%	45 100%	16 100%	20 100%	36 100%

表6-2 身の回り行為の介護の有無（後期高齢者）

	非要介護認定者						要介護認定者		
	手帳なし			手帳あり			男	女	計
	男	女	計	男	女	計			
あり	6名 3.1%	2名 0.9%	8名 2.0%	1名 4.2%	2名 8.7%	3名 6.4%	8名 20.5%	6名 5.7%	14名 9.7%
なし	189 96.9%	210 99.1%	399 98.0%	23 95.8%	21 91.3%	44 93.6%	31 79.5%	99 94.3%	130 90.3%
計	195 100%	212 100%	407 100%	24 100%	23 100%	47 100%	39 100%	105 100%	144 100%



前期と後期を比較すると、非要介護認定者ではともに後期高齢者で「不自由はない」が少なくなり、「床や家具に手をつけている」人が多くなっている。しかし要介護認定者ではむしろ逆転していた。

#### 4) 靴下を履く状況

更衣の一つである靴下を履く状況について立ってもたれずに履くことを最高レベルとしてみると、前期高齢者では、表8-1に示す

ように、「もたれずにしている」は非要介護認定者のうち身障手帳なしでは57.0%、手帳あり42.2%、また要介護認定者では5.6%であり、3群間に著明な差があった。

一方「もたれてしている」は12.3%、11.1%、13.9%であり、「座ってしている」は26.1%、42.2%、69.4%であった。そしてこの3つのレベルを合計した「自立計」ではそれぞれ95.5%、95.6%、88.9%とほとんど差がなくなった。このように、ここでも単に「自立」

表7-1 畳や床からの立ち上がり（前期高齢者）

	非要介護認定者						要介護認定者		
	手帳なし			手帳あり			男	女	計
	男	女	計	男	女	計			
不自由はない	223名 89.6%	186名 78.5%	409名 84.2	23名 82.1%	11名 64.7%	34名 75.6	3名 18.8%	2名 10.0%	5名 13.9
床や家具に手をつけている	21 8.4%	30 12.7%	51 10.5	1 3.6%	5 29.4%	6 13.3	9 56.3%	14 70.0%	23 63.9
助けてもらっている	1 0.4%	1 0.4%	2 0.4	2 7.1%	0 0.0%	2 4.4	2 12.5%	2 10.0%	4 11.1
行っていない	1 0.4%	1 0.4%	2 0.4	0 0.0%	1 5.9%	1 2.2	2 12.5%	1 5.0%	3 8.3
返答なし	3 1.2%	19 8.0%	22 4.5	2 7.1%	0 0.0%	2 4.4%	0 0.0%	1 5.0%	1 2.8
計	249 100%	237 100%	486 100%	28 100%	17 100%	45 100%	16 100%	20 100%	36 100%

表7-2 畳や床からの立ち上がり（後期高齢者）

	非要介護認定者						要介護認定者		
	手帳なし			手帳あり			男	女	計
	男	女	計	男	女	計			
不自由はない	150名 76.9%	145名 68.4%	295名 72.5%	17名 70.8%	13名 56.5%	30名 63.8%	13名 33.3%	16名 15.2%	29名 20.1%
床や家具に手をつけている	34 17.4%	57 26.9%	91 22.4%	4 16.7%	7 30.4%	11 23.4%	22 56.4%	66 62.9%	88 61.1%
助けてもらっている	1 0.5%	2 0.9%	3 0.7%	2 8.3%	1 4.3%	3 6.4%	3 7.7%	9 8.6%	12 8.3%
行っていない	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 2.6%	5 4.8%	6 4.2%
返答なし	10 5.1%	8 3.8%	18 4.4%	1 4.2%	2 8.7%	3 6.4%	0 0.0%	9 8.6%	9 6.3%
計	195 100%	212 100%	407 100%	24 100%	23 100%	47 100%	39 100%	105 100%	144 100%

かどうかではなく、どのようなやり方で「活動」を行なっているかをみることの重要性が示された。非自立である「はかせてもらっている」は0.4%、0%、11.1%であった。

次に、後期高齢者では、表8-2に示すように、「もたれずにしている」は40.5%、27.7%、11.1%であり、著明な差があった。一方「もたれてしている」は15.7%、19.1%、21.5%であり、「座ってしている」は40.3%、

48.9%、59.7%で、3つのレベルの合計の「自立計」は96.6%、95.7%、92.4%で差はほとんどなくなり、前期高齢者と全く同じことがみられた。非自立である「はかせてもらっている」は0.5%、0%、3.5%であった。

前期と後期を比較すると、非要介護認定者では後期高齢者で「もたれずにしている」が少なくなり、「もたれてしている」「座ってしている」が多くなっている。

表8-1 靴下を履く（前期高齢者）

	非要介護認定者						要介護認定者		
	手帳なし			手帳あり			男	女	計
	男	女	計	男	女	計			
もたれずにしている	142名 57.0%	135名 57.0%	277名 57.0	11名 39.3%	8名 47.1%	19名 42.2%	2名 12.5%	0名 0.0%	2名 5.6%
もたれてしている	34 13.7%	26 11.0%	60 12.3%	5 17.9%	0 0.0%	5 11.1%	1 6.3%	4 20.0%	5 13.9%
座ってしている	68 27.3%	59 24.9%	127 26.1%	10 35.7%	9 52.9%	19 42.2%	11 68.8%	14 70.0%	25 69.4%
はかせてもらっている	2 0.8%	0 0.0%	2 0.4%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 12.5%	2 10.0%	4 11.1%
返答なし	3 1.2%	17 7.2%	20 4.1%	2 7.1%	0 0.0%	2 4.4%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
計	249 100%	237 100%	486 100%	28 100%	17 100%	45 100%	16 100%	20 100%	36 100%

表8-2 靴下を履く（後期高齢者）

	非要介護認定者						要介護認定者		
	手帳なし			手帳あり			男	女	計
	男	女	計	男	女	計			
もたれずにしている	78名 40.0%	87名 41.0%	165名 40.5%	9名 37.5%	4名 17.4%	13名 27.7%	2名 5.1%	14名 13.3%	16名 11.1%
もたれてしている	37 19.0%	27 12.7%	64 15.7%	3 12.5%	6 26.1%	9 19.1%	6 15.4%	25 23.8%	31 21.5%
座ってしている	74 37.9%	90 42.5%	164 40.3%	12 50.0%	11 47.8%	23 48.9%	25 64.1%	61 58.1%	86 59.7%
はかせてもらっている	0 0.0%	2 0.9%	2 0.5%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	5 12.8%	0 0.0%	5 3.5%
返答なし	6 3.1%	6 2.8%	12 2.9%	0 0.0%	2 8.7%	2 4.3%	1 2.6%	5 4.8%	6 4.2%
計	195 100%	212 100%	407 100%	24 100%	23 100%	47 100%	39 100%	105 100%	144 100%

## Ⅱ. 参加の状況

### 1. 家庭内の自分の役割

#### 1) 家庭内役割の状況

家庭内の役割の状況についてみると、表9-1、9-2に示すように一見して男女差が著明であった。たとえば、「特になし」は表9-1にみるように前期高齢者では非要介護認定者のうち身障手帳なしでは全21.8%、内男性では34.5%、女性では8.4%であり、身障手帳ありでは全31.1%、うち男性46.4%、女性5.9%であった。また、要介護認定者では全38.9%、うち男性62.5%、女性20.0%で

あった。

後期高齢者でも表9-2に示すように手帳なしで全18.7%、うち男性25.1%、女性12.7%、手帳ありでは全29.8%、うち男性41.7%、女性17.4%、また要介護認定者では全41.0%、うち男性69.2%、女性30.5%であった。

このように「家庭内役割なし」は3グループ間で明らかな差があるが、特に男性についての差が大きかった。前期高齢者と後期高齢者との差はそれほどではなかった。

表9-1 家庭内の役割：回答者別（前期高齢者）

	非要介護認定者						要介護認定者		
	手帳なし			手帳あり			男	女	計
	男	女	計	男	女	計			
特になし	86名 34.5%	20名 8.4%	106名 21.8%	13名 46.4%	1名 5.9%	14名 31.1%	10名 62.5%	4名 20.0%	14名 38.9%
家事	13 5.2%	98 41.4%	111 22.8%	0 0.0%	5 29.4%	5 11.1%	0 0.0%	4 20.0%	4 11.1%
家事自分が注力時に手帳あり	12 4.8%	28 11.8%	40 8.2%	1 3.6%	0 0.0%	1 2.2%	0 0.0%	5 25.0%	5 13.9%
家事一部	20 8.0%	5 2.1%	25 5.1%	2 7.1%	2 11.8%	4 8.9%	0 0.0%	1 5.0%	1 2.8%
庭いじり	14 5.6%	1 0.4%	15 3.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 5.0%	1 2.8%
家庭菜園	33 13.3%	6 2.5%	39 8.0%	1 3.6%	0 0.0%	1 2.2%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
留守番	0 0.0%	1 0.4%	1 0.2%	1 3.6%	0 0.0%	1 2.2%	1 6.3%	1 5.0%	2 5.6%
家族の介護	1 0.4%	2 0.8%	3 0.6%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
その他	6 2.4%	1 0.4%	7 1.4%	1 3.6%	0 0.0%	1 2.2%	1 6.3%	0 0.0%	1 2.8%
複数回答	55 22.1%	66 27.8%	121 24.9%	8 28.6%	9 52.9%	17 37.8%	4 25.0%	4 20.0%	8 22.2%
返答なし	9 3.6%	9 3.8%	18 3.7%	1 3.6%	0 0.0%	1 2.2%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
計	249 100%	237 100%	486 100%	28 100%	17 100%	45 100%	16 100%	20 100%	36 100%

次に目立つのは複数回答が多いことで、前期では 24.9%、37.8%、22.2%、後期では 30.2%、23.4%、29.9%であった。

そのため以下項目別（合計は 100%以上）にみると、前期高齢者では表 9-3 に示すように、身障手帳なしでは「家事」が最も多く 32.3%（男性 9.2%、女性 56.5%）、次に「家庭菜園」24.5%（男性 27.7%、女性 21.1%）、「庭いじり」17.3%（男性 20.1%、女性 14.3%）、「家事（一部）」13.2%（男性 17.7%、女性 8.4%）であった。身障手帳ありでも同様の順

位で「家事」31.1%（男性 3.6%、女性 76.5%）、「家庭菜園」26.7%（男性 28.6%、女性 23.5%）、「庭いじり」17.8%（男性 17.9%、女性 17.6%）、「家事（一部）」15.6%（男性 17.9%、女性 11.8%）であった。要介護認定者では「家事（一部）」が最も多く 19.4%（男性 25.0%、女性 15.0%）、次に「家事（自分が主だが時に手伝いあり）」19.4%（男性 0%、女性 35.0%）、「家事」16.7%（男性 0%、女性 30.0%）、「留守番」16.7%（男性 25.0%、女性 10.0%）であった。

表 9-2 家庭内の役割：回答者別（後期高齢者）

	非要介護認定者						要介護認定者		
	手帳なし			手帳あり			男	女	計
	男	女	計	男	女	計			
特になし	49名 25.1%	27名 12.7%	76名 18.7%	10名 41.7%	4名 17.4%	14名 29.8%	27名 69.2%	32名 30.5%	59名 41.0%
家事	15 7.7%	47 22.2%	62 15.2%	2 8.3%	8 34.8%	10 21.3%	2 5.1%	19 18.1%	21 14.6%
家事自分が主だが時に 手伝いあり	12 6.2%	9 4.2%	21 5.2%	0 0.0%	1 4.3%	1 2.1%	0 0.0%	4 3.8%	4 2.8%
家事一部	18 9.2%	14 6.6%	32 7.9%	0 0.0%	1 4.3%	1 2.1%	1 2.6%	2 1.9%	3 2.1%
庭いじり	15 7.7%	7 3.3%	22 5.4%	2 8.3%	0 0.0%	2 4.3%	1 2.6%	4 3.8%	5 3.5%
家庭菜園	28 14.4%	12 5.7%	40 9.8%	3 12.5%	0 0.0%	3 6.4%	1 2.6%	1 1.0%	2 1.4%
留守番	5 2.6%	4 1.9%	9 2.2%	1 4.2%	0 0.0%	1 2.1%	2 5.1%	3 2.9%	5 3.5%
家族の介護	0 0.0%	1 0.5%	1 0.2%	1 4.2%	0 0.0%	1 2.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
その他	7 3.6%	3 1.4%	10 2.5%	0 0.0%	1 4.3%	1 2.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
複数回答	39 20.0%	84 39.6%	123 30.2%	4 16.7%	7 30.4%	11 23.4%	4 10.3%	39 37.1%	43 29.9%
返答なし	7 3.6%	4 1.9%	11 2.7%	1 4.2%	1 4.3%	2 4.3%	1 2.6%	1 1.0%	2 1.4%
計	195 100%	212 100%	407 100%	24 100%	23 100%	47 100%	39 100%	105 100%	144 100%